



Data	
監督:	ジェームズ・マーシュ
脚本:	ジョー・ベンホール
出演:	マイケル・ケイン/ジム・ブ ロードベント/トム・コート ネイ/チャーリー・コックス /ポール・ホワイトハウス/ マイケル・ガンボン/レイ・ ウィンストン/フランチェ スカ・アニス

## 👁️👁️ みどころ

『死に花』(04年)で躍動したのは、平均年齢70歳超の老人4人だったが、本作の「七人の侍」=「窃盗団」のそれは60歳超！そんな老人たちが、英国史上最高額の金庫破りに挑戦！

『死に花』も『オーシャンズ』シリーズ(01年、04年、07年、18年)も手際の良さが“売り”だったが、本作では、犯行中の口論が顕著なら、戦利品の分配を巡って仲間割れ状態になるから、アレレ・・・。彼らはホントに英国紳士？その歳まで何を学んできたの？

そんなドジを踏んでいたのでは、「御用！」も裁判も当然だが、2015年に英国で起きた実話をもとにした本作ラストでは、老人たちの連観したような、そして皮肉に満ちた会話の数々に注目！

もっとも、私は決してこんな老人になりたくないが・・・。

—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————

## ■□■キング・オブ・シーヴズとは？「七人の侍」の活躍は？■□■

去る1月23日に観た『ミッション・マンガル 崖っぷちチームの火星打上げ計画』(19年)は、インドのインド宇宙研究機関(ISRO)に結集した「七人の侍」=「科学者」が大活躍する物語だった。それに対して本作は、「七人の侍」=「泥棒」が、英国史上最高額の金庫破りで大活躍する物語。タイトルになっている『キング・オブ・シーヴズ』=「泥棒の王」と称されているのは、今は裏社会から引退している77歳の男・ブライアン(マイケル・ケイン)。彼は、愛する妻と仲良く暮らしている間は「悪いことはしない」との約束を守っていたが、妻が死んでしまうと・・・？

私は1997年にロンドンの街並みを一度だけ見学したことがあるが、そこには、ロンドン随一の宝飾店街・「ハットンガーデン」があるらしい。旧友(悪友)のケニー(トム・

コートネイ) から、そこでの大掛かりな窃盗計画を聞くと、ブライアンじいさんもついでムラムラ……。さあ、本作に見るブライアンの下に結集した「七人の侍」＝「泥棒」は、どんな活躍を……？

## ■□■日本版の平均年齢は70歳超！本作のそれは60歳超！■□■

高齢化が進む日本では、若者の貧困化に対して老人のリッチさが目立っている。しかし、そんなリッチな老人たちが飢えているのは“生きがい”らしい。そんな時代状況と、2004年に日本国を揺るがした“年金問題”の中で生まれた、犬童一心監督の『死に花』(04年)は実に面白かった(『シネマ4』338頁)。もっとも、同作で17億円の銀行強盗に決起したのは、「七人の侍」ではなく、4人の老人たち。その平均年齢は70歳超だったが、知能面ではもちろん、肉体面でもそのパワーは健在だったし、老人ホームにおける恋愛模様さえ描かれていた。

それに対して、本作でブライアンを中心に集まった「七人の侍」の平均年齢は60歳超だ。すると、2004年の日本版に比べると、2018年の英国版たる本作に見る「七人の侍」＝「窃盗団」の活躍は、もっとアクティブ！そう思ったが、その中には今回はじめて参加する1人の若造・バジル(チャーリー・コックス)も入っていたから、他の6人の“老人ぶり”はかなり顕著だ。したがって、そこで交わされる会話も老人ネタが多いので、少し心配。互いに健康不安を語り、互いの不満や皮肉ばかり言い合っているこんな老人たちで、本当にあつと驚く大仕事ができるの？

## ■□■鍵はあっても作業はハード！犯行の成否は？■□■

「脱走モノ」の歴史的な傑作『大脱走』(63年)は、脱走のための穴掘り作業のあり方が、ハードながらも楽しくかつ分かりやすく描かれていた。しかし本作は、「ハットンガーデン」の金庫内に入っていくための作業手順がさっぱりわからないのが、少し不満だ。ブライアンが、若いバジルが持ち込んできた計画に乗ったのは、バジルが金庫の入っている建物のカギを持っていたため。それを受けて、ブライアンが結集した「七人の侍」で下見をしてみると、警備の甘くなるイースターの連休を狙い、ドリルで金庫室に穴を開ければ侵入と強奪は可能と判断された。この手順を見ていると、「さすが熟練のプロぞろい」と感心しきりだが、いざ、敢行してみると……？

『大脱走』でも計算と実際の食い違いが随所に生じていたが、それは本作も同じ。もっとも、想定外に鳴り始めたアラームはバジルの才覚でうまく処理できたし、やってきた警備員が諦めて帰ってくれたのはラッキーだった。しかし、やっとな穴を開けたものの、侵入用の機材が壊れてしまうと、それぞれに口の達者な老人たちは口論になり、結局その日の作業は中止、翌日に繰り越すことになったから、アレレ……。？2020年の夏開催とされていた「東京五輪」も、中止ではなく1年間の延期とされたが、いかにイースターの連休中とはいえ、金庫強奪作戦の1日延期なんてあり得るの？そんな疑問を持ちながらも、スクリーン上では、翌日も老人たちがさまざまな作業を続けた結果、金庫室の中への侵入

に大成功！

こうなると、後は一つ一つの貸金庫を壊し、その中身をいただくだけだ。貸金庫は小さいが、その中には現金や高価な宝石がタンマリ入っている。「七人の侍」たちはそれを片っ端から大きな袋に詰め込み、意気揚々と引き上げたが・・・。

## ■□■いい歳をして仲間割れ？これまで何を学んできたの？■□■

黒澤明監督の最高傑作『七人の侍』（54年）は、生き残る者と死んでいく者の別はあったが、「七人の侍」の結末は固く、互いの信義は最後まで守られていた。『死に花』でも、4人の老人たちの絆は固かった。しかし本作では、ブライアンを含む6人の老人たちは、英国紳士には程遠い、強奪品の配分を巡る“仲間割れ”状態になっていくので、それに注目。

ブライアンがなぜ最初から「七人の侍」のリーダーになったのかはよくわからないが、それは当然の“格”のようなものだった。しかし、犯行の現場では次第にそこでよく働いたテリー（ジム・ブロードベント）とダニー（レイ・ウィンストン）の発言力が強くなっていくことに。そして、戦利品の分配を始める頃になると、「成功は自分たちの手柄だ」と主張するテリーとダニーの強硬な態度の前に、バジルはわずかばかりの現金で追い出されてしまう等、「七人の侍」の結末はバラバラに。もちろん、テリーとダニーの言い分はメチャクチャだが、ひそかにブライアンと絡むかのような動きをしたバジルにも問題があったし、事あるごとに戦利品をネコババしていたビリー（マイケル・ガンボン）にも問題があった。

『死に花』で見た70歳超の4人の犯行の動機は、17億円の戦利品に魅力を感じたためではなく、「70歳を過ぎても、なおこれから一花も二花も咲かせたい」と願う“生きがい”のためだった。それに比べると、本作に見るバジル以外の6人の老人は、いい歳をしてこれまで何を学んできたの？本作中盤で描かれる、こいつとあいつ、あいつとこいつの仲間割れのサマは、情けない限りだが・・・。

## ■□■警察の捜査は？「七人の侍」のガード（の甘さ）は？■□■

中国は監視カメラだらけの監視社会だが、実は先進民主主義国であるイギリスも至る所に監視カメラが設置されていることに注目！これは、プライバシー保護の観点からは大問題だが、犯罪捜査に威力を発揮することは、本作を観ているとよくわかる。

他方、結果的に英国史上最高額の金庫破りになった事件を描く本作導入部では、窃盗のプロ集団であるブライアンたちが、盗んだ宝石類の処分方法や犯行後のトンズラ（国外逃亡）方法等についても念入りの計画を立てているから、安心感（？）がある。ところが、犯行後は一転して「七人の侍」のガードの甘さにビックリ！

その最たるものは、既に仲間割れ状態になっているブライアンと、ダニー、ケリーらが会って分け前協議をする場所を、隠れ家ではなくレストランにしていること。コロナ禍の

今、日本のマスコミでさかんに暴露され批判されているのが政治家たちの会食。彼らが弁解するように、食事が目的ではなく、陳情を聞いたり、話し合いをすることが目的であれば、夕方から高級レストランや高級料亭でやる必要はなく、昼間に会議室でやればいいのではないか、ということだ。それと同じように（?）、いやそれ以上に、ブライアンたちの分け前協議のための会合を、公衆が集まるレストランでやるのは不適當。隠れ家でやるのが当然だ。ブライアンたちの感覚は、年とともにボケてしまったの？

そう思っていると、ブライアンたちの会話は店員たちに筒抜けになっていただけではなく、テーブルには既に盗聴マイクが仕掛けられていたから、アレレ！事件発覚後、大捜査網を敷いていた捜査陣に彼らの会話は丸聞こえだ。本作は実話の映画化らしいが、これを見てみると、「七人の侍」たちのガードの甘さにビックリ！

## ■□■御用！の後は？老人たちの皮肉に富んだ会話に注目！■□■

1600万人突破！韓国歴代観客動員数NO. 1になった『エクストリーム・ジョブ』（19年）（『シネマ46』239頁）では、「水原カルビ味チキン」を売り物にしたチキン店を開業することによって潜入捜査に邁進した麻薬捜査班の5人組にビックリなら、取引現場を押さえて、「悪党界のドリームカムトゥルー」たちを一網打尽にする大捕り物にもビックリさせられた。本作ラストは、それに匹敵するような英国警察の威信をかけた大捕り物が展開されるので、それに注目！その現場は、ブライアンの自宅とダニー、ケリー等が集まっている一軒家の2か所。しかし、ろくな武器も持っていないこんな老人の逮捕に、こんな重装備の大捜査陣を出動させる必要があるの？

本作にはそんな疑問があるうえ、そもそも、こんな「共謀共同正犯」による多額の窃盗事件の裁判を進めるについては、1人ずつの分離公判にするのか、それとも全員をまとめた公判にするのかをはじめとして、難しい問題がいっぱいある。被告人たちの間で、犯罪関与の程度や役割等についての供述が割れれば、なおさらその判断は難しい。しかし、本作は弁護士の私が注目するそんな論点を一切無視し、公判に向かう老人たちの、いかにも達観したかのような、そして皮肉に富んだ会話の数々を浮かび上がらせているので、それに注目！

「老人特有の病気を持ち出しても、裁判官は斟酌してくれない」、などの会話はさすがだが、「刑務所生活より、死後の世界の方が心配だな」などの冗談は、かなり哲学的・・・？しかも、同じ部屋の中で正装に着替える中での会話や、そろって法廷に向かう通路での会話によって、ブライアンとダニー、ケリーらの対立は収まり、敵意も不信感も一掃されたようだから、やはりこの老人たちの連帯感は素晴らしい。

そんな楽し気な老人たちの会話風景を見れば、ストーリー終了後に字幕で表示される各自の刑罰はどうでもいいだろう。1人だけ逃走したバジル以外の6名の老人たちの人生最後の大奮闘とその後の静かな刑務所生活（?）に合掌。2021（令和3）年2月1日記